

事例報告

第 20 回大柴杯スピーチコンテストのご報告

全学共通カリキュラム運営センター英語教育研究室大柴杯委員／
外国語教育研究センター設置準備室特任准教授
シュロスブリー 美樹

英語教育研究室主催「第 20 回大柴杯スピーチコンテスト」が、2019 年 12 月 14 日(土) 14 時より池袋キャンパス 8201 教室にて開催された。20 年目の節目の年を迎えた今年度の大柴杯スピーチコンテストには 6 学部から 12 名の学生が参加し、さまざまな思いをのせた英語スピーチを披露した。今年度のテーマは“Taking the Next Step”。さまざまな問題に対してどう次の一步を踏み出せば良いのか、学生たちは現在の問題に焦点をあてながら、明日の自分や未来の社会に向けてメッセージを送っていた。本稿では、大柴杯スピーチコンテストの 20 年の歴史をふり振り返りながら、第 20 回の報告をする。

大柴杯スピーチコンテストは、2000 年度に起こった悲しい出来事をきっかけとして始まった。この年の 4 月に本学法学部の 1 年次生、大柴利信君が不慮の死を遂げた。わずか 50 日あまりの在学期間となってしまったが、英語が好きで活潑な利信君は、すでに ESS のサークルにも所属していた。このように英語が好きで利信君のことを想われ、その後もまなくご両親の大柴利男・順子ご夫妻が本学の英語教育研究室にご寄付を申し出られた。英語教育研究室はこの寄付金を利用して、英語スピーチコンテストを企画するに至ったのである。このように本スピーチコンテストのきっかけは大変悲しい出来事ではあるが、20 年後の今日も英語が好きで学生たちと熱心な英語教員たちによってイベントが開催され、利信君の後輩たちの英語力を磨く場となっていることを考えると感無量である。

こうして大柴杯スピーチコンテストは毎年秋学期に行われるようになったが、大会の準備は春学期から行われている。企画・運営を行うのはランゲージセンターの英語教員からなる「大柴杯スピーチコンテスト委員会」である。委員会は春学期のうちから該当年度のスピーチテーマを決め、学生に直接ポスターで募集告知をするとともに、英語クラス担当教員にスピーチ参加者の募集をアナウンスする。特に必修科目の英語プレゼンテーションクラスや上級英語クラスからは参加希望者が毎年多い。大会参加を申し込んだ学生は、原稿やスライドを作成し、英語クラスの先生にスピーチの指導を受けながら練習を積み重ねていく。また、スピーチの審査を行うジャッジに選ばれた学内の英語教員は、委員会の作成した審査基準の説明を事前に受け、その厳正な基準に従い審査を行うこととなっている。

今年度の大柴杯スピーチコンテスト参加者の所属で特に多かったのは、グローバル・リベラルアーツ・プログラム (GLAP) (5 名) と社会学部 (3 名) であった。そのほかコミュニティ福祉学部、観光学部、経営学部、異文化コミュニケーション学部からも各



スピーチに臨んだ学生たち

1 名が参加した。昨年度は異文化コミュニケーション学部の参加者が多かったのも年によってばらつきがあるものの、近年 GLAP からの参加者が増加している傾向にある。留学生の参加も増え、より多様性を感じさせるイベントに成長しつつある。また、スピーチコンテストの情報は一般の学生にも告知されている。さまざまな学部から今年も応援の学生が駆けつけ、スピーチをする学生とご家族、ご友人に加えて、一般の学生、教員、運営側を含めると総計 60 名以上の楽しいイベントとなった。

今年度のテーマ “Taking the Next Step” は、社会問題に対しても、個人的な問題においても、次なる一步を踏み出そうという意味でつけられた。受付でプログラムを受け取ると、今年はどのようなスピーチが行われるのだろうか、皆ワクワクした気持ちでスピーチのタイトルを確認していた。各スピーチのタイトルと参加者名は以下の通りである。

“Becoming an Individual” (Junya Eriguchi)

“The Key to Our Happiness” (Sara Ito)

“Taking the Next Step in Attitudes about Adoption” (Sachina Takeyama)

“The First Step to Solve Global Problems” (Yuna Nangou)

“Holding the Olympic Games in 2020” (Ayano Yamada)

“10 % of Your Life” (Sana Sugita)

“Make Your Own Choice” (Akiko Yanagi)

“Taking the Next Step Across Cultures” (Muen Chen)

“How Can We Help People Who Try to Take Their Own Lives ?” (Haruka Takabatake)



当日の様子

“Dear AI: We Are Human” (Ming Chi Chou)

“Failing Forward” (Mei Sakamoto)

“Discovering My Own Identity” (WooHyuk Song)

当日は全学共通カリキュラム運営センター部長の井川充雄教授による開会の挨拶の後、1人5分のスピーチが速やかに始まった。当スピーチコンテストでは一昨年まで演壇の前に立って行うスタイルでスピーチが行われていたが、昨年からは演壇の使用を止め、スクリーンの横に立って自由に動きながら話すスタイルに切り替えられた。より自由で、よりリラックスできて、より聴衆との距離が近いスピーチスタイルを学生が好むようになったからである。これも時代の流れである。

休憩を挟んですべてのスピーチが終了した後、審査員らは別室に移動して協議を行った。学生たちにとってはスピーチが終了してホッとすると同時に、ドキドキして待つ短いようで長い時間である。審査員が協議を終え会場に戻って来ると、それまで楽しそうにおしゃべりをして待っていた学生たちが真剣な顔をして静まり返った。コンテスト再開後、英語教育研究室主任の師岡淳也准教授によるコメントを挟んで、結果発表が行われた。優勝は、経営学部2年の柳晏貴子さん、2位にはGLAP1年の竹山幸那さん、3位には異文化コミュニケーション学部1年の高島遥さんが選ばれた。結果発表後、入賞者には大柴ご夫妻のご寄付によるメダルと副賞が、参加者全員に20周年記念の参加賞（ノート）が渡された。最後に審査員のRon Martin准教授によるコメントがあり、第20回大柴杯スピーチコンテストは2時間半の緊張感とともに充実した時間の幕を閉じた。

20年にわたる大柴杯スピーチコンテストを顧みた時、毎年の大会参加の学生に盛大

な拍手を送るとともに、大柴スピーチコンテストを20年にわたって見守ってこられた大柴ご夫妻に感謝の意を表したい。また、学生に個別スピーチ指導する教員、イベント運営を行う教員、さらに観客として楽しみにして足を運んでくださるご家族、ご友人、一般の学生なしにはイベントを存続させることはできない。関係者の皆さまに感謝申し上げます。

しゅろすぶりー みき